

法華経と読経道

—芸道としての法華経読誦—

(要旨)

柴 佳世 乃*

『法華経』(『妙法蓮華経』)は日本において宗派を越えて広く読まれてきたが、これがどのように読誦されたのか、その歴史的展開を宗教的・芸能的観点から眺めてみたい。

「読経道」とは、法華経読誦が芸道化したもので、平安末期から鎌倉初期にかけてかたちを整え、中世を通じて芸道として在ったことが確かめられる。現在では途絶えてしまったこの芸道について、読経道が生まれた経緯やそこに至る背景、さらにその位相を捉える。

一、法華経読誦と読経道

弘安7年(1284)に能誉によってまとめられた『読経口伝明鏡集』は、読経道の口伝書の要をなすものであるが、本書ならびに他資料により、読経道の要点は以下のように捉えられる。

- I 字声・清濁・音曲の三事の修練が骨格。
- II 師資相承を伴う。「読経道」の音曲の(伝説的)始祖は、平安中期の道命阿闍梨。中興の祖は、後白河院と目される。
- III 僧俗によって行われた。後白河院、後鳥羽院、後嵯峨院らが関わり、王権が関与することによって芸道化が進んだ。
- IV 鎌倉後期に、体系を持った口伝書が撰じられた。芸道として形を整えるのは、院政期末より鎌倉初期と推定される。

読経道の淵源を辿ると、例えば『大日本国法華経験記』には、芸能的な読経に言及する事例が多く見出される。持経者は、『法華験記』に至る平安中期までがピークと考えられるが、その後もその行が消えていくわけではない。平安から鎌倉期に至る中で、持経者から能読へ、という直線的な流れがあったのではなく、行としての読経も脈々と続いていったことがわかる。

二、読経道の展開

読経道の成立から展開において、大きな山が三つほどある。まず一つ目が平安中期の道長の時代、二つ目が後白河院・後鳥羽院の時代、三つ目が後嵯峨院の時代である。これらはもちろん地続きで展開していくが、芸道として成る過程に以上のような三つの読経への関心の高まりが存したと考えられる。その三つの時代のありようを、諸資料に辿った。

三、どのように読誦されたか

読経道において『法華経』はどのように読誦されただろうか。法会場で、実際にいかに読誦されたかを探る。読経道を芸道たらしめる「読経音曲」とは、いくつかの観点に基づき現在わかっていることをまとめると、以下のようなものである。

- 音曲の構成…「四句甲乙」「叩」「乱句」といった音曲の方法が存した。このうち、「四句甲乙」が読経道の要である。
- 詞章…経文の長行・偈のいずれも(可変的に)、節を付けて唱えられたと考えられる。
- 曲節…読経の口伝書に曲節の説明がごく僅かであるが見出されるので、それを現存する経文の博士に照らし合わせて復曲を試みている。
- 読経の作法および心得…読誦する際の心構え、技法、聞かせ方(パフォーマンスの方法)などの記述が、口伝書に記されている。

*

日本における法華経の享受・展開の中で、特に読経に的を絞り、その音曲的な歴史的展開について考察した。読経は法会の中で繰り返し行われ、その行は変わることなくなされたが、音曲の持つ宗教的価値や芸能的要素が大きく伸張した時代があり、読経道の形成に至る。読経道の口伝書はまた、法華経信仰に強く支えられていることも重要である。

*千葉大学教授